

第4回・夏休み自然観察記録コンクール

身のまわりの自然をよく見て、作文や絵にくわしくかいてみよう

だて・すけしげ
1932年三笠市生まれ
学芸大学札幌分校修了
三笠市立教育研究所所員
空知教育研修センター講師

伊達佐重

小学生を対象にして第四回「夏休み自然観察記録コンクール」を行なった。当協会と北海道新聞社、北海道新聞野生生物基金が共催の形をとり、北海道教育委員会にも後援名義の承認をうけ実施した。

会報NCで会員にも紹介をし、道内の各市町村教育委員会にコンクールの募集要項を送り管内小学校への配付を依頼した。また学校の在籍児童数が最も多い札幌市内には、各小学校長あての文書を別に作成して協力をお願いした。

北海道新聞社が七月二十五日（朝刊）、七月二十六日（夕刊）、八月一日（夕刊）、八月八日（朝刊）、八月十三日（夕刊）と五回も全道版に募集広告を掲載してくださったことに對しお礼を申し上げる。

○審査員

依 浩三（道自然保護協会会長）
佐藤 謙（副会長）
畠山 武道（同 会副会長）
吉備津政博（道新野生生物基金理事・事務局長）
鮫島惇一郎（自然環境研究室主宰）
伊達 佐重（道自然保護協会常務理事）
福地 郁子（同 常務理事）
大久保フヨ（同 理事）

広い全道の各地から集まった作品は八十八点であった。締め切り日は九月十日だったが例年ぎりぎり届ける人が多いことも考慮して九月十六日に審査をした。午前中から全作品に目を通して入賞に該当すると思われるものを選び出した。夕方、審査員がそろったので最終審査を行なった。作品

判定の難しさは多いが、中でも頭をかかえるのは本人以外の手が加わっているかどうかの見極めである。

誤字や脱字もなく主語と述語の表現も完べきな文章を小学生に望んでいる訳でないのだから、そういう作品を見ると色々な意見がでてかえって手間どることが多かった。

○入賞者は次の通りである。

金賞

該当者なし

銀賞

西川 直輝（栗沢町立栗沢小学校五年）

エゾゼミの羽化

木谷 尚史（士幌町立士幌小学校三年）

ニセイカウシュツペ山の高山植物

伊藤 結美（恵庭市立若草小学校二年）

おたまじゃくしがカエルになるまで

銅賞

橋本 雄太（大野町立大野小学校六年）

大野町にすむ魚たち

稲葉 智美（函館市立柏野小学校五年）

コオロギの観察

坂 尚憲（札幌市立緑丘小学校四年）

自然の虫の観察

刀禰 浩一（根室市立花咲小学校三年）

タガメの飼育

刀禰 春洋（同 二年）

トンボの羽化

西田 智紀（稚内市立稚内中央小一年）

北海道にもいるかぶと虫

今 勝 (栗山町立栗山小学校六年)

せみの羽化

山本百合亜 友 (長沼町立長沼中央小六年)

藤井 美静 (共同作品)

紙の吸い上げ実験

有好 宏文 (旭川市立啓明小学校四年)

うさぎの観察

遠藤 真澄 (東神楽町立東聖小学校四年)

畑の番人トビ

甲斐原拓真 (札幌市立平岸高台小三年)

ざりがに

藤井 志帆 (札幌市立白石小学校三年)

セミのよう虫のぬげがら

水野 真希 (旭川市立日章小学校三年)

アオムシの体調べ

西條 正親 (札幌市立太平小学校三年)

こん虫しらべ

太田沙央里 (同 三年)

草花のかんさつ

脇山真理美 (長沼町立長沼中央小三年)

でんぶんノート

鈴木 崇弘 (栗山町立栗山小学校三年)

かなちよろの観察

岩船 傑 (札幌市立福住小学校二年)

家の畑観察

稲葉 貴子 (函館市立柏野小学校二年)

お花の国

加藤 夕貴 (札幌市立大倉山小二年)

なつ休みの思い出、夕貴の虫とり
若林 遼 (札幌市立小野幌小二年)
セミのよう虫のかんさつ

高橋 泰弘 (札幌市立北光小学校一年)

こん虫たちを見つけた

千代 武志 (旭川市立永山南小一年)

無題

佐々木里菜 (旭川市立東栄小学校一年)

きばなコスモスのえにつき

横山 直弥 (教育大付属札幌小一年)

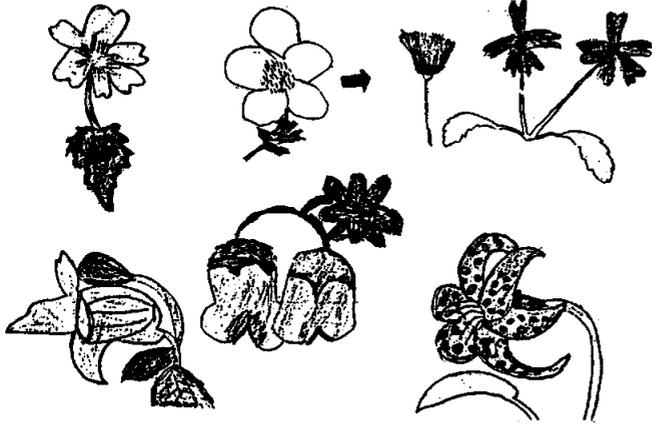
ぼくのいわ

山崎 静香 (長沼町立長沼中央小一年)

おしぼな

ニセイカウシユツペ山の高山植物

三年 木谷 尚史



審査を終えて

二・三年生の健闘光る

全道各地から八十八点(共同研究一点を含む)の作品が集まりました。今年は飛び抜けた作品が見当たらなかったため、残念ですが金賞を見送りました。

今回の作品で目立ったのは、二・三年生によい仕上がりが多かったことです。たとえば二年生は十一点の中で六人、三年生は二十七点の中で三分の一が入賞するという好成績でした。

銀賞の伊藤結美さんは、オタマジャクシがカエルになるまでを根気よく記録しました。変化のようすや受けた感動を、自分の言葉で表現していたのが、審査員に評価されました。

次に木谷尚史さんは、お父さんたちとニセイカウシュツッペ山に登った時に、登山道で見たり聞いたりしたことをまとめました。千九百坪に近い急な山道を上り下りしながらの走り書きを、後で整理するのは大仕事だったろうと思います。

また西川直輝さんは、間近で見たエゾゼミの羽化を細かい正確な線画で

八つの場面にまとめました。絵のうまさ、ピカいちでした。

銅賞の中では、セミのぬけがらの数の多少と土の固さは関係があるかどうかをクイズ形式でまとめた岩船 傑さん、家で飼っているウサギの世話をしながらかよく観察し、絵と文に表現した有好宏文さん、そして昆虫を温かい心で見つめる刀禰春洋、浩一さん兄弟のうまさが目を引きました。

〈資料〉

学年別応募点数と入賞者数

学年	応募点数	入賞者数				
		金賞	銀賞	銅賞	佳作	計
1	21	該 当 者 な し	0	1	5	6
2	11		1	1	4	6
3	27		1	1	7	9
4	13		0	1	2	3
5	8		1	1	0	2
6	8		0	1	2	3
計	88	0	3	6	20	29

第4回 夏休み自然観察記録コンクール

- 募集テーマ/●身のまわりの自然をよく見て、作文や絵に詳しくかいてみよう。
- 応募資格/●道内に在住する小学生。
- 応募規定/●作文用紙は自由な規格。低学年は絵日記ふうにまとめてもよい。
◆絵は画材、用紙、大きさ自由。応募の例として
(1)作文だけ (2)作文と絵 (3)絵だけなど自由。
◆作文は裏に、絵は裏にそれぞれ応募票を貼る。
(題、住所、氏名、学校名、学年、電話番号を明記してください)
◆作文はページ番号、絵には順序を示す月・日や番号を入れる。
- 応募先/〒060 札幌市中央区北3条西11丁目 加南ビル5
(社)北海道自然保護協会 ☎011-251-5465
- 締め切り/1997年9月10日(水)必着(郵送可)
- 入賞者の発表/10月下旬の北海道新聞紙上で入賞者を発表し、本人または在学する小学校へ名簿を発送します。
- その他/応募作品は返知しません。優秀作品は北海道新聞および自然保護協会の広報誌などに掲載します。本年度(1997年)の作品で未発表のものに限ります。

賞	金賞 1名 (賞状、図書券10,000円)
	銀賞 2名 (〃 〃 7,000円)
	銅賞 6名 (〃 〃 5,000円)
	佳作 20名 (賞状、オリジナルビデオ)

最後に来年のために一言つけ加えておきます。
①自分の言葉と絵で、②野外での観察を中心に、③手書きの字と絵を。
(一九九七・九・二六の道新より転載)

(北海道新聞 1997年7月26日)

優秀作品紹介

銀賞

エゾゼミの羽化

空知・栗沢町立栗沢小学校五年

西川 直輝

〈観察と感想〉

①羽化の前は、木の幹にしっかり固定しておちないようにしている。

(セミが羽化するとき、ちゃんと準備しているなんてすごいと思った)

②頭部と前肢の部分がでた。

(ふかみどりと赤の部分が、なにになるか気になりました)

③足がぜんぶでて、のけぞりじょうたいのときが一番あぶない。

(セミがゆだんすると、おちるのでしんぱいでした)

④のけぞりじょうたいから起きあがり、しっぽをぬく。

(自分でかんぜんにだっぴするなんてすごいと思った。ふかみどりと赤が羽になった)

⑤ぜんぶでたあとは、はねがのびるだけ。

(だっぴしたあとの、しっぽの先についているのが気になった)

⑥あとは、はねがのびるだけ。

⑦はねが伸びきって、あとはかたくなるのをまつだけ。

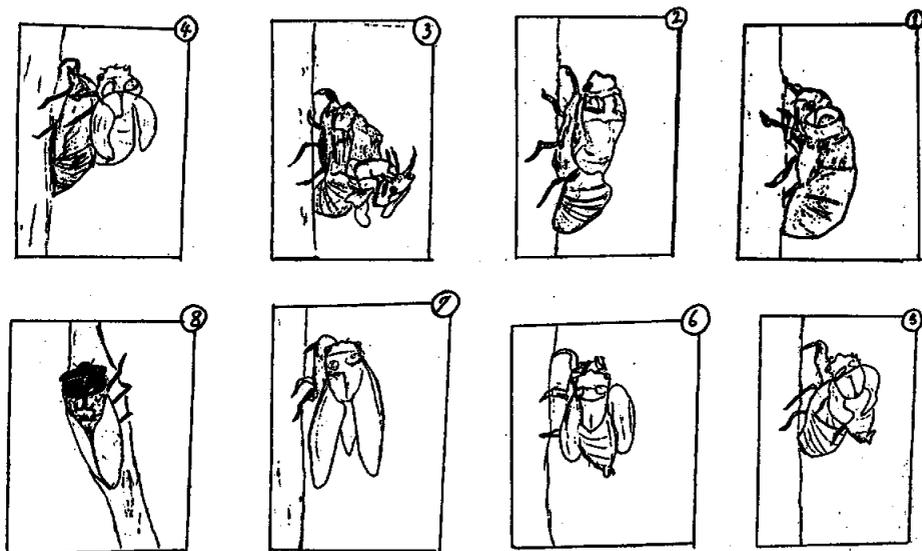
(はねがかわかないうちにさわると、水ぶくれ

になる)

⑧エゾゼミのせいちょう。

(このセミは、よく下むきにとまる)

エゾゼミの羽化の図



銀賞

ニセイカウシュツペ山の高山植物

十勝・土幌町立土幌小学校三年

木谷 尚史

〈記録〉

ニセイカウシュツペ山(標高一八七八呎)

七月二十七日、晴れ。登山口〓午前八時五十分、頂上〓十一時四十五分、下山〓午後三時十一分

ぼくは、父さんと父さんの友だちとニセイカウシュツペ山に登りました。ニセイカウシュツペ山は、ガケのある山という意味です。

しばらく登って、雪がありました。食べてみました。あつくて、あつくて、きぜつしそうだったので、すっとしておいしかったです。

ちょう上についてから、べんとうを食べました。けしきを見ると、青空がどこまでもつづいていました。おうふく六時間かかりました。つかれたけど、高山植物がたくさん見られてよかったです。

〈観察〉

アキアカネは池、沼で生まれて七・八月を山の上ですごす。登山口から一五〇〇呎までたくさんいたが、その上にはいなかった。色はおしりが赤いが、地上(町内)で見るより赤がうすい。九月末から十月に地上におりて、たまごをうみすぐ死ぬ。

〈高山植物〉(抜粋)

①一一八〇―一五三三呎付近で十八種

シロバナニガナ、マイズルソウ、ミヤマリンドウ、タカネニガナ、エゾウサギギクなど

②一五三三―一七四二呎付近で十一種

ことにした。

〈結果〉

①コオロギを観察したうち、よく食べる物は、きゅうり、なすなどの野菜であった。トンボは、コオロギをとってきた時(八月二日)に、いっしょにいれてしまったが、やはりすぐに死んでしまい、その死がいをコオロギが、一週間(八月九日)で、全部食べてしまった。その後、やはりいっしょの虫かごに入れてしまったバツタも、その五日後(八月十四日)死んでしまい、食べられてしまった。コオロギが少しふとったように思う。

②昼の天気の良い、気温二十九度の日、家の中日当たりと風とおしりのよいところに、置いたばかりの時コオロギは、しょっかくを動かしながらすばやく動きはじめ、えさのかげのほうに、すぐかくれるようにしてしまった。なくこともしなかった。

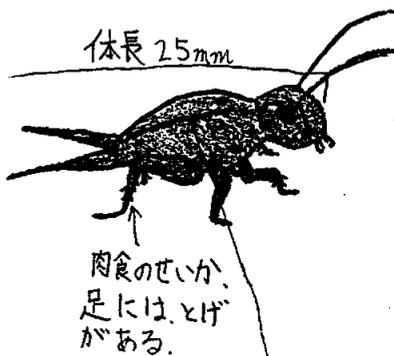
くもりの日の気温二十一度の時、同じ場所に置くと、かごの中のすみのほうをしょっかくを動かして、すばやく動いていた。これは、気温が、高かった日(二十九度の時)より、よく動いていたように思う。

③昼の明るさの時のコオロギは、ものかげにかくれて、じっとだまっていたままあまり動かなかった。

けれども、夜になって暗い時の様子を見てみると、かごの中、あちらこちら動き回っていた。コオロギは、暗い時によく動くのだとわかった。

〈気がついたこと〉

コオロギは、食べ物では野菜も食べるけれども、



体長 25mm

どちらかというところ、トンボやバツタの死がいなどのほうが、よく食べるのだと知った。トンボやバツタがかわいそうだったように思う。今度昆虫採集の時は、コオロギとは別の虫かごに入れなければならぬと思った。

気温の変化では、あまり暑い日は動かず物かげにかくれていたけれど、少しずしくなると、よく動くということを知った。

明るさのちがいで、昼より夜のほうがよく動き、これはコオロギが明るさをみわけることができることと知った。

それから今回は、特に調べなかったが虫かごをげんかんのげた箱の上においたため、げんかんのドアのあけしめの音に対する反応もみられた。ドアのしめる『バタン』という音に対しても動きがあった。このことから、音をききわけることもできるということを知った。

私は、今回の観察でコオロギの様子や、性質がよくわかりました。でも、バツタやトンボなどの、

羽はあるが、とぶためではなく、たすめのものどす。バツタのように、がこしはなく、すばやく歩く。

他の虫を食べてしまうのを見ると、かわいそうな気にもなったけれど、生きていくにはしかたのないことかとも思いました。広い草原で生きていたコオロギを、こんな小さな虫かごにかかってしまったことを、こうかいました。これからは、昆虫採集をしても、なるべく自然にかえしてやらなければならぬと思いました。

銅賞

大野川にすむ魚たち

渡島・大野町立大野小学校六年

橋本 雄太

あたりが夕やみにつまれ出した時、川下にある橋の方からうすい黄緑色のカーテンがせまってきた。そのカーテンは、ゆっくりゆっくりと川をおおっていく。しいんと静まりかえった暗がりと静けさの中での不思議な光景。『イブニングライ

自然の虫の観察（抜粋）

札幌市立緑丘小学校四年

坂 尚憲

八月七日（木）雨上がりの午後二時、家のわ
ハサミムシ石の下、かれ草の下など少ししめつ
た所にいた。まだ体が小さくて、すきとおつて
る、生まれたばかりのはさみむしの赤ちゃんがた
くさんたまっていた。まるでキャンプしに来てい
るみたいだ。楽しそうにうごきまわっていた。

ミミズ土の中にもぐったり、出たりしていた
かと思うと、やわらかいどろのようなものをフチュッ
といきおいよく出してもぐった。何だろうと思う
とウンチだった。はじめてミミズのウンチを見て
大わらした。

ゲジとてもすばしっこくてびっくりした。は
じめはにげられてしまった。でもあとからはへい
きだった。ときどきしんだまねみたいなきことをし
ながら、たくさんの足でいろいろな所に動きまわっ
ていた。そしてコンクリートのかべをのぼってと
なりに行ってしまった。前と後ろの形が同じだっ
た。

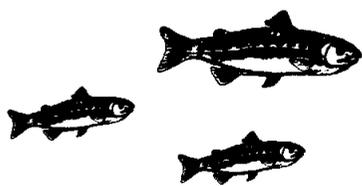
イモムシ毎年、畑で見る。去年はナスビの所
にいたのでナスビの葉っぱを食べて生きているの
かなあと思ったが、今年はナスビがないので何を
食べて生きているかなあと思ふしぎに思った。石の
上には、さなぎのぬけがらがあった。

八月十五日（金）はれ、午後五時、あらい山、りよく地
山にはどんな虫がいるかと思ひ観察しに行った。
一坪ぐらいの草がはえている所に入っていくには、

すものよび名で、海に降りるものをサクラマス、
アママスというのだそうだ。同じ種類でも、陸封
型と降海型で名前が変わってしまうのはおもしろ
いと思った。

つつた魚を食べてみたくて、ぼくはその場でさ
ばいてみることにした。魚の食べ物は、水生昆虫
と甲虫だ。ぼくのつつた魚からは、つりのえさに
したイクラとカワゲラやカゲロウ・トビゲラなど
が出てきた。大きめの魚には、小さい甲虫もびっ
しり入っていてびっくりした。やはり、たくさん
のえさを食べる魚は成長もいんだなあと思った。
ぼくの一歩の発見は、ウグイと川カジカにはな
かった『あぶらビレ』である。これは、サケ科の
魚に特有なもので、川で産まれて海へ降り、また
川へ帰ってくるという魚についているヒレだ。ぼ
くが大野川でつつたヤマベやイワナ・ニジマス・
アママスには、背ビレと尾ビレの間に黒っぽくて
小さなあぶらビレがあったから、まちがひなく仲
間の魚だということがわかった。

最近、清流にすむイ
ワナがへってきている
という話をラジオで聞
いた。ぼくは、冷たい
清流にしかすまないイ
ワナがいる大野川をほ
こりにし、いつまでも
その清流を守っていき
たい。そして、これか
らも川からたくさんの
発見と感動を分けても
らいたい。

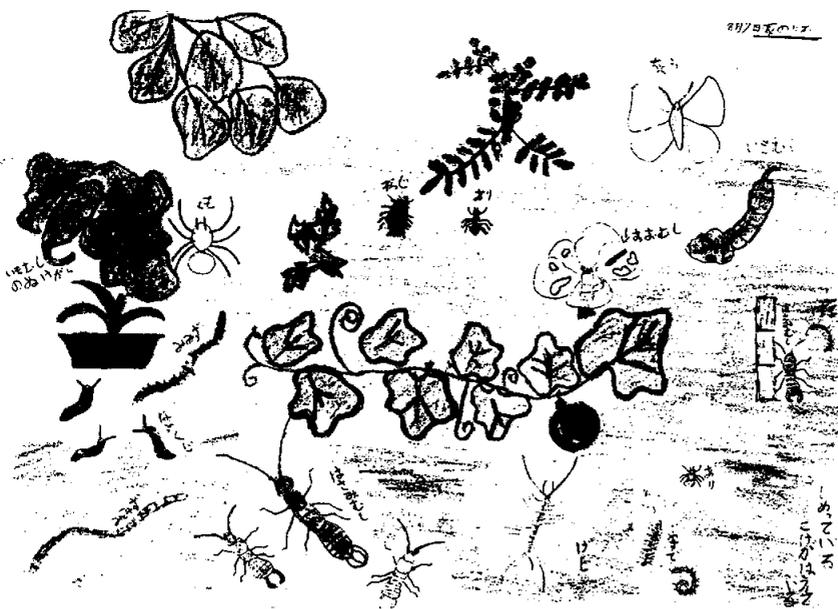


ズだ』父がおどろきと喜びのいりまじったよう
な声でさげんだ。暗い水面のあちこちで、何びき
もの魚たちがバシヤ・バシヤとジャンプしている。
ぼくの住んでいる大野町には、大野川という川
が東西の方向に流れている。ぼくはこの夏休み、
家族とつりを楽しみながら、大野川に住む魚のこ
とについて調べてみることにした。

まず、標高や場所によって生息する魚たちにか
ちがあるかどうかを調べるために、六ヶ所のポ
イントを決めた。一番標高の高い場所は、渡島と
松山のきょうかいにある中山峠付近で、最も下流
は、となり町の上磯町とのさかいにある島川地区
である。そして、その間を大体四等分して上流か
ら①〜⑥とポイントに番号をつけた。

大野川でつれた魚は、ヤマベ・イワナ・ニジマ
ス・ウグイ・川カジカ・アママスの六種類だった。
魚の種類にはつきりとしがちがいがあつたのは、
第一ポイントと第六ポイントだった。最下流の第
六ポイントではウグイだけで、一番標高がある上
流の第一ポイントでは、イワナしかつれなかった。
中流の第三・第四ポイントでは、イワナのほかに
ヤマベやニジマスもつれた。上流に行けば行くほ
どイワナが多くなるということから、川の魚にも
テリトリーみたいなのがあるんだなと思った。
また、上流のイワナは腹が黄色がかったのだが、
中流のものには白いものが多かった。同じイワナ
でも種類がちがうのかなと疑問に思つて見比べて
みたら、体の色や白いはん点の大きさや尾びれの
大きさがちがうことに気がついた。父にたずねた
ら、天然のイワナは腹が黄色がかっていて、養しよ
くの放流魚や降海型のものとはちがうということ
だった。また、ヤマベ・イワナは一生を川で過ご

とても勇氣がある。何が出てくるかわからない。ぼうでつつきながらすすんだ。かれ葉やしめった所には、ゴミムシダマシ、ミミズ、オカダンゴムシ、ハサミムシがいた。また、クモも多く、とくにアシナガグモが多かった。目の前をヤマオニグモがクモの糸の上を歩いて行った時には、どきっと気持ちが悪かった。クモのすには半分になったカタツムリや、ひっかかったトンボなどもいた。



札幌市立緑丘小学校4年 坂 尚 憲

〈観察をおえて〉

いろいろな虫が見たくてさがしたが、あまり見つけることができなくてさんねんだった。

でも、よく見かけるハサミムシでも、いろいろなはさみの形があり、おすとめすでもはさみの形がちがう事、そして、はさみでほかの虫などはさむ事も知った。

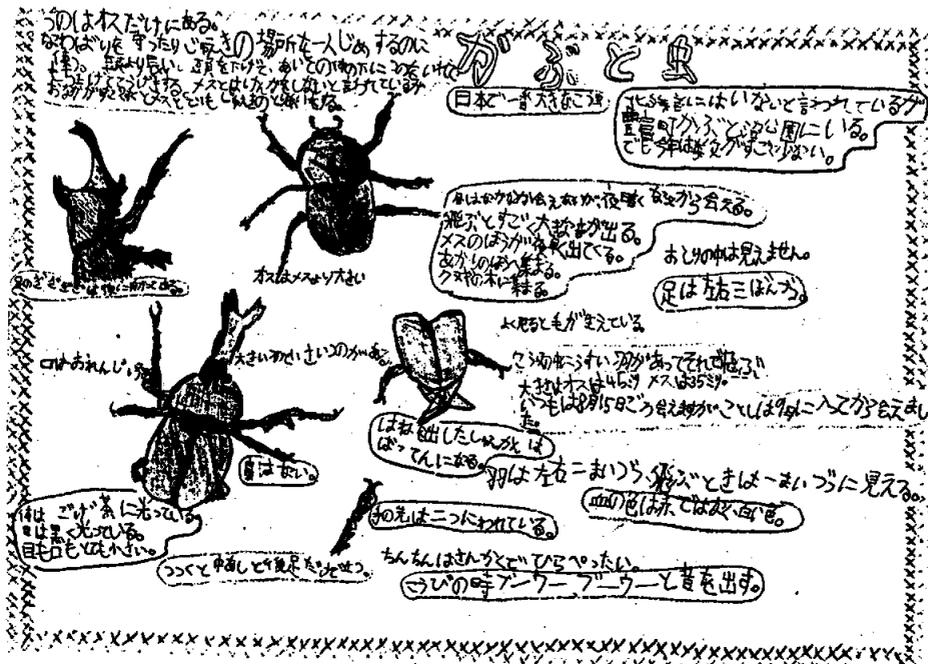
虫を発見してすぐ図かんを見ても、にている虫がいなくてこまった。でも、体の色やひげの長さや体の長さをよく観察してさがした。ミミズがウンチをするのを見てとてもおかしかった事、ゲジが出てきてびっくりした事、何が出てくるかわからない原っぱをきんちょうしながら歩いた事、ブロッコリーの葉に二十七ひきのような虫を見つけた時の気持ち悪さなど、自然っておもしろいなあと考えた。

銅賞

北海道にもいるかぶと虫

稚内市立稚内中央小学校一年

西田 智紀



トンボの羽化（抜粋）

根室市立花咲小学校二年

刀禰 春洋

ぼくは、六月の終わりごろ、ゲンゴロウを採りに行った時、ヤゴもいっしょに十二匹採れました。ふつうのヤゴより大きいので、ヤンマ科のヤゴだとすぐにわかりました。去年もルリボシヤンマとギンヤンマのヤゴが、家で羽化したので、ヤゴの大きさを見て、わかったんです。

ギンヤンマやルリボシヤンマのだった皮の回数、十一回といわれているので、大きさを聞いて、ぼくの採ってきたヤゴは、九回ぐらいのやつです。あと一回か二回で、羽化しそうなばかりです。採ったその時に、だっ皮しているのもしました。ヤゴのだっ皮は、むねのせなかの部分がたてにわれ、幼虫の白いむねが、あらわれます。はらからおしあげるように力をいれると、頭がでてきます。そしてゆっくりむねの部分がでます。長い足がぬげてから、尾をぬきます。全体が白っぽいんです。一日位たつと、うす茶色のヤゴの色になります。いろいろな昆虫のだっ皮を見たことがあります。ヤゴのだっ皮は、わりとかんたんに見えます。と中で、だっ皮できないで、苦しうにして死んでしまったヤゴを、今まで見たことがありません。羽化が近くなったヤゴは、せなかの羽が目立ってきます。そういうヤゴが何匹かいたので、ヤゴの様子と羽化が、学校でみんなと見れるといいと思つて、ヤゴを入れたケースを教室へ持っていき

エサは、生きたトゲウオをやるのと、おりたたんでいた下口びるをガバツとのぼして、エサをとらえます。ヤゴは、かみちぎって食べます。

ヤゴは、ビックリさせると、ジェットキがとぶようなかんじで、ピュッとすばやく動いたりします。

教室に持って行ったヤゴは、なかなか羽化しませんでした。終業式の日に、やっと一匹羽化しました。その時、ちょうど帰りのそうじをしていました。ぼくは、自分の教室ではなく、別の教室に行っていました。ぼくのところへ、クラスの友だちが走ってきて、「刀禰君、早く教室に来て。先生がよんでいるよ。」とむかえにきました。ぼくは、ビックリして、なんか先生に注意されることをしたかなと思つて、友達に「先生おこつてるの？」と聞きました。「何もおこつてないよ。」と言つたので、安心していそいで教室へ行きました。

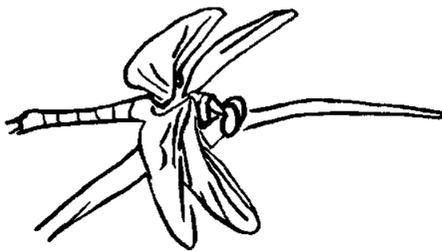
そして先生やみんなが、ヤゴのケースに集まっています。「刀禰君、トンボになったよ。」って言いました。ぼくも見たら、きれいに羽化していました。何の昆虫もそうだけど、羽化したばかりが、とてもきれいです。

ぼくは、夏休みに入る前に、みんなで見ることができて本当によかったと思ひました。

昆虫を育てることは、むずかしいけれど、上手にかうと、かんさつするととてもおもしろいので、これからもいろいろかつてみたいのです。

トンボの羽化がみたくて、ヤゴをかうなら、ヤンマ科のヤゴが、わりとかんたんで、育てやすいです。他のヤゴは、水の流れがないとだめだったり、水がいつもきれいでないと育たなかったり、むずかしいですが、ヤンマ科のヤゴは、それほど

水かえもいっしょなくても大丈夫でした。家のヤゴは、全部羽化して、とびたつていきました。元気で長生きしてほしいと思ひました。家で羽化してくれてありがとう。



タガメの飼育（抜粋）

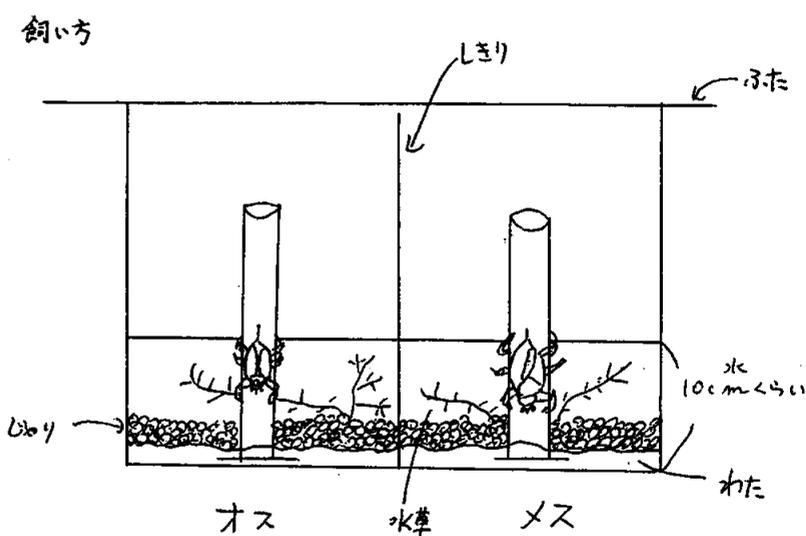
根室市立花咲小学校三年

刀禰 浩一

ぼくは、去年の秋からタガメを育てています。タガメというのは、水生昆虫の中で最大で今では数もげきげんしているののでききゅうしゅに指定されている昆虫です。北海道には生息していないといわれています。だから、ぼくのタガメも自分で採集したものではありません。ある新聞に、水生昆虫が好きな札幌の小学三年生の男の子が、飼っていたタガメが卵を産んだという記事を見ました。ぼくと同じで水生昆虫が好きなんだなあと思っ、て、じゃうほうこうかんをたくて手紙を書きました。そうしたら、なんとうまれたタガメの成虫のオス・メスをペアでおくってくれたのです。そして、タガメのことがくわしく書いてある本も紹介してくれました。ぼくにタガメをくれた鶴川君は、夏休みに福島県に行ってタガメを買ってきたそうです。ぼくのタガメの飼育が始まりました。タガメを飼育するのは初めてなので、紹介の「タガメのすべて」という本を読んで飼いました。

一つの水そうにオス・メスを入れ、共食いしたらこまるので、真ん中にしきりを入れました。水そうの一番下に、ろか用のわたをしいてその上にジャリをしき、タガメがつかまるための直径二センチくらいのぼうくいをオス・メス用、二本立てしました。ぼううは、水面から十五センチくらい出し、水草も入れ、水は十センチくらい入れました。ろかそうちは入れなくていいそうです。水は、三日に一度くら

いとりかえます。



どんな水生昆虫でもそうだけど、水そうに入れる水は、太陽に二三日あてたものを使います。にげ出さないようにフタをしました。

エサは、生きたオタマジャクシ、小魚などで、ペットショップで売っている和金でもいいんだけど、ぼくの家近くに池や川があって、そこでトゲウオの稚魚がとれるので、それを一日に一

二匹やりました。エサは、食べたらすぐ取り除きます。食べるといっても、針のような口をエサにさし、消化液を出して肉をとかして吸います。エサをとる以外はジーンとしていてあまり動きません。

タガメは冬眠するので、エサは五〜十月の間あげました。十一月になったら、水そうは氷らないであまり温度変化の少ない寒い所に置いて、春まで冬眠させました。ふだんは、おしりの先から空気をとり入れ、はらとはねの間にためます。シュノーケル式呼吸法というそうです。でも、冬眠中はほとんど水底にいました。水そうの水はじょうはつするので、時々水をたします。

春先は体の調子をくずしやすいので、四月にはエサを与えないと本に書いてあったのですが、水の中でけっこう動きまわっていました。家の中があたたかかったので、早く目ざめたのかなあと思っ、て四月二十五日からエサをあげました。メスはすごいきおいで食べました。オスも食べました。オスよりメスのほうが体が大きいので、メスのほうが元氣よく見えます。(以下省略)